

編集実行委員会便り

交通に焦点を合わせた特集としては、『輸送とエネルギー』(Vol. 12, No. 2, 1991年3月)以来、15年ぶりに企画させていただいた。この間の周辺状況の変化や技術革新は著しく、いろいろな切り口から交通システムと省エネルギーに関して最新の貴重な情報をご提供いただいた執筆者の皆様には、深くお礼申し上げる次第である。

今回あらたに取り上げたいと願ったものの一つが自転車である。筆者が、勤務先の京都と自宅のある東京の街中を自転車で積極的に走り出してから3年になり、交通システムにおける自転車の重要性を日々実感していることが根底にあった。そこで、サドル上から見た街中の交通についての雑感をお伝えしたい。

まず、京都と東京では街の構造の違いにより、自転車の利用度合いが異なる。碁盤の目のように道が走っている京都は、多少遠いところでも、誰でもほとんど迷うことなく行くことができる。一方、迷路状の東京では幹線道路からいったん外れるとタクシードライバーのような土地勘が必要となる。京都では(もともとバス中心の交通体系に加え)この地形的明快さも一因となって東京に比べて遠距離の移動でも自転車利用度合いが高い。筆者の大学の学生もほとんどが自転車通学であって通学定期を持っているものはわずか、東京の大学生の多くが電車等で通学していることと対照的である。

本格的なサイクリングが趣味というほどでもない、ふつうの自転車乗りである筆者の場合、交通手段が発達している街中で、あえて自転車に乗って出かけるには、以下の条件が満たされる必要がある。①雨が降っていないこと、②汗をかいてもさしつかえないこと、③目的地までが15km程度以内であること(この距離内なら他の交通機関と比べても時間的に遜色なくほぼ1時間で到着できる)。

上記の3条件が満たされると自転車利用は快適かというところ、そうではない。東京では幹線道路でさえ自転車用レーンはほとんどなく、京都では幸い堀川・五条・御池などの大通りには部分的にはあるものの全体的な状況は東京とあまりかわらない。結果的に、人が歩いていない場合は歩道を走ることになるが、歩道の真ん中に電柱が突っ立っていてやむなく車道に出なくてはならない箇所が多々ある。車道を走る場合は、すぐわきを駆け抜けていく高速の車におびえながらペダルをこぐ。もちろん、車道と歩道の区別のない道も多い。(そのような道で夜間に車とすれ違ったとき、ヘッドライトが逆光でまぶしいことに加えて道ばたに寄りすぎ、電柱に激突したこともある。すれ違うのがもう少し



遅れていたなら、転倒したところを轆かされていたところだった。)

大きな交差点にいたっては、自転車の通行が“想定外”となっていることが多い。写真は、堀川五条の恐らく京都でいちばん大きな歩道橋であり、自転車がこの交差点を通過するには、交差点からはるかに離れた信号に回り込まなくてはならない。この歩道橋のそばを通りかかるたびに、宇沢弘文先生が『自動車の社会的費用』(岩波新書1974年62ページ)で書いておられた次の文章を思い出す。

この横断歩道橋ほど日本の社会の貧困、俗悪さ、非人間性を象徴したものはないであろう。自動車を効率的に通行させるということを主な目的として街路の設計がおこなわれ、歩行者が自由に安全に歩くことができるということはまったく無視されている。あの長い、急な階段を老人、幼児、身体障害者がどのようにして上り下りできるのだろうか。横断歩道橋の設計者たちは老人、幼児は道を歩く必要はないという想定のもとにこのような設計をしたのであろうか。わたくしは、横断歩道橋を渡るたびに、その設計者の非人間性と俗悪さとおもい、このような人々が日本の道路の設計をし、管理をしていることをおもい、一種の恐怖感すらもつのである。

また、サドル上でいやおうなく気付かされることは、自動車は何と熱い機械かということである。夏季に信号待ちで自動車の前後や左側に止まると、ものすごい熱気に圧倒される(冬季は暖かい)。そりゃそうだ。渋滞する街中を時速10km程度で走行し1時間に1リットルのガソリンを燃焼させると仮定してみよう。その発熱量は約34MJ(8,000kcal)だから3,600秒で割って9kW程度。巨大なストーブが動いているようなものだ。

自転車なしには暮らせなくなってしまった筆者にとっての夢は、街中の自転車ハイウエーの敷設だ。単に専用レーンを作るだけではない。自転車にとって最大の障害の一つである雨に対して屋根を設置する。自転車はライトが非力で危険なので、屋根上には太陽電池を設置し、夜間の照明の補助とする。既に存在する自動車道の上の高いところでも、エレベーターが装備されれば利用は可能であろう。初夢は、一無事、二近、三足美。

吉田英生

(京都大学大学院工学研究科航空宇宙工学専攻教授)

E-mail: yoshida@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp